

最終報告提出日：2012年6月25日

東京大学大学院人文社会系研究科  
次世代人文社会学育成プログラムによる海外派遣  
帰国報告

文学部思想文化学科宗教学宗教史学専修過程4年  
中村 芳雅

派遣先での活動

1. 派遣機関

大学名：ヴィクトリア大学（カナダ、ヴィクトリア）

プログラム：Digital Humanities Summer Institute

受講講義：Introductory TEI Seminar（Julia Flanders）

2. 派遣期間

平成24年6月3日～平成24年6月10日

3. 派遣の概要

ヴィクトリア大学の夏季プログラム DHSI（Digital Humanities Summer Institute）に参加。DHSIではJulia FlandersによるIntroductory TEI Seminarの受講、研究員による研究報告の聴講、Unconferenceの参加の三点を主体に行う。Introductory TEI SeminarではTEIエンコーディングの基礎、研究報告で北米研究員のDH（Digital Humanities）に関する最新の研究成果をそれぞれ学び、UnconferenceではDHに関する諸問題を形式にとられない形で議論した。

4. 研究成果

- TEIの基礎的なエンコーディングを学ぶ。授業は基本的な内容に終始しており、授業自体に複雑なものはなかった。  
授業の参加者は研究者に留まらず、図書館関係者も多く、学術的な話に留まらない実務的なTEIの利用方法が多く議論された。そのため、TEIがどのような形で用いられているのか、どのようなことが求められているのか、という実技的な問題と課題を多く学ぶことが出来た。
- 研究報告の受講、Unconferenceでは分野に捉われないDHの最新研究成果を学ぶ。DHという分野が新しいものであるためか、その発表内容、議論内容は他分野のよ

うな明確な領域を持たない。まだその研究領域も模索段階と考えることもできた。それだけに Unconference では議論の内容が非常に多岐に渡り、様々な視座からの意見が交わされ、現在の DH に関する諸問題を理解することができた。

## 5. 今後の展望

プログラム全体を通して、DH は新しい分野であるために、研究の模索と進展が同時に進んでいるように見受けられた。Digital の情報が拡大する現在において、Humanities と Digital がいかに関係するかは、Digital から見た Humanities の視点、Humanities から見た Digital の視点の双方において、DH は今後欠かすことができない重要な問題であるのではないと思われる。そのことから DHSI は現地主催者にとっても、DH の発展過程の一部として考えられていたと思われる。

以上の内容から、日本の DH 研究はまだ発展途上であるが、それは DH の推進者である欧米でも同様であると考えられる。従って日本と欧米の DH 研究はある意味でそれほど大きな相違を持っているわけではないと考えられる。しかし同時に発展過程である DH において、その過程を日本が持っていないことも確かでもあり、それは今回受講した TEI などの基礎的な情報がまだ日本では注目されていないことにも見ることができる。

これらのことから今後の課題は TEI をはじめとする、DH の基礎情報を理解することが挙げられる。これらを理解すれば、日本から欧米で行われる DH の動きに参入することは十分に可能であり、Digital と Humanities の双方にとってこれらは今後欠かすことができない問題になると考えられる。